

ダンガンロンパ FAKE

個人情報の流出

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

希望ヶ峰学園からのスカウトを受け、『超高校級』として学園にやって来た俺……オダメマキ 芋環ユウリ 侑李は、目を覚ますと自らの才能を忘れ、見たこともない研究所に居た。

裏切りと、希望と、絶望。俺たちが巻き込まれたコロシアイの先には、一体何があるのか。

これは、俺たちの、本物の『コロシアイ』の話。

目次

プロローグ	くようこそ特才研究所	
ようこそ特才研究所	1	1
ようこそ特才研究所	2	28

プロローグ くようこそ特才研究所く

ようこそ特才研究所 1

—— 本当にこれでいいの？ と、■■■が言った。

—— ああ、これでいいんだ。と、俺は言った。

これは俺が選んだことだ。例えば、大切なものが全部壊れてしまうとしても構わない。これだけが、きっと、俺の……■■■の生きてきた証になると思うから。

—— それじゃあ、あとは任せた。

そう言うのと、■■■は悲しそうな顔をした。そんな顔をするなよ。俺は、大丈夫だからさ。

—— じゃあな。もう二度と会わないことを、願ってる。

俺は■■■と別れる。でも、これが終わりじゃない。ここからが始まりだ。薄れゆく意識の中で。俺は、そんなことを考えた。

ダンガンロンパ F A K E

「……え、き………てるう？」

柔らかい声が聞こえる。

「おー………きてえ………え？」

脳を溶かすくらい甘い声。

「……きてつてばあ、ね………おーい？」

なんだか懐かしくて、それでいて心地よくて……。

「起きてつてばあつー！」

「うわあああつ!？」

……だからこそ。急に大きな声を出されると、ものすごくビツクリする。うとうととした微睡みもどこかへ飛んでいき、なんだなんだと顔をあげると……そこにいたのは、女の子だった。

「もおー、やつと起きたあ。さつきからずーつと起きてえって言うてるのに、なかなか起きないんだもおん」

蜂蜜みたいな甘い声に、間延びした話し方。ふわふわとした黄緑色のミディウムボブ

の髪の毛。童顔だが、目元の泣き黒子が色つばい。ほっぺたを膨らませて、俺を可愛く睨み付けるその女の子に見覚えはなかった。

「……………めん」

「まあ、別に謝らなくてもいいけどさあ。……………それよりさあ」

女の子は綺麗なターンで、くるりと辺りを見回した。顔にかかった髪の毛をさつと手で払うと、はにかむように笑う。

「……………どこか知ってるう？」

「……………え？」

言われて、辺りを見る。少し黄ばんだ白い壁と、等間隔で配置された、理科室に置いてあるような長机が六つ。どことなく理科室っぽいが、見覚えのあるいつもの学校の理科室ではない。

部屋の天井近くの四隅に何も映されていないテレビが設置されている。本来窓があるだろう場所は、がっちりとボルトで固定された鉄板で塞がれている。

「……………(ハハ)はどこだ？」

「いや、知らない。どこだ(ハハ)」

って言うか、俺はなんでこんなところに居るんだ？ 記憶に霧がかかったみたいに何も思い出せない。辛うじて思い出せるのは……………自分の名前、だけだ。

「んー、君もわかんないかあ。あたしもわかんないだよねえ。人がいないかなあつて一つ一つ部屋を見て回つてるときに君を見つけたからあ、なにか知つてるかなあと思つて起こしたんだけどお……あたしと同じように眠つてただけっぽいねえ」

どうやらこの女の子も俺と同じ状況のようで、何もわからないみたいだ……つて、これかなり不味い状況なんじゃないか？ 二人して見覚えのない場所にいるなんて普通じゃないぞ。一体何が起こつてるんだ？

「あ、そーだあ、自己紹介！ いやあ、すっかりうっかり忘れてたあ。これから一緒に行動するんだからあ、自己紹介は大切だよねえ」

「え、一緒に行動つて？」

「あれえ？ 探索しないのお？ だつてさあ、全く知らない場所にいるのにい、あたしたちは特に拘束されてないんだよお？ これが誘拐とかだつたとしてもお、この場所の探索はしていいつてことだと思ふんだあ」

口元に指を当てててそう言う女の子は、こんなおかしい状況だつてのにやけに冷静だ。こいつが言う通り、俺たちは今、誘拐されてるみたいなの状況に居るんだぞ？ それに、こいつは今さつき目覚めたみたいなの口ぶりだつたんだ。普通混乱して、まともに物を考えなんてできないだろ。なのになんでこんなに普通にされてるんだ？ まるで……
「こういうのに、慣れてるみたいじゃないか」

「んう？　こういうのつてえ？」

「え、あつ……」

しまった、口に出てたみたいだ。

「ああ！　こういう状況に、つてことかなあ？　んー、別に慣れてるとかじゃないんだけどお。何て言ったらいいのかなあ？　あたしとつても幸せだからあ、別に細かいことは気にならないんだよねえ」

……はあ？

「今、何て言った？　幸せ？」

「うん。幸せえ。あたしは今も昔もこれからも、ずっとずーつと幸せだよお！」

こいつが何を言ってるのか理解できない。だってさぬき言つてたじゃないか、誘拐されたみたいって。誘拐されたみたいなのに幸せ？　ここがどこかもわからないのに、幸せ？

「……いや、なんだよそれ。おかしいだろ、こんな状況で」

「なんにもおかしくないよお。あたしはあ、『超高校級の幸運』だからねえ！」

『超高校級の幸運』……？

「うん。あたしは『超高校級の幸運』の、立藤四葉タチフジヨツバつて言うんだあ！」

『超高校級』。その言葉を聞いたとき、頭の奥がピキリと疼いた。それと同時に思い出

す。希望ヶ峰学園からスカウトされたこと。期待と希望を胸に、希望が峰学園の門をくぐったこと……でも、その先が思い出せない。俺の記憶は、そこまででぶつかりと途絶えている。

「……大丈夫？ 顔色悪いよお？」

「……いや、大丈夫、だよ。大丈夫、俺は」

急に記憶が戻った影響なのか、まだ頭がくらくらするけど……大丈夫だ。こいつの……四葉の話を聞くくらいなら、できる。

「本当？ それならいいけどお……。希望ヶ峰学園からスカウトされてえ、校舎に入ったら急にくらくらしてしてえ、それで、気づいたらこの場所で眠ってたみたいなんだあ。不思議だよねえ、何が起きたんだらお」

「……俺もそうだよ。希望ヶ峰学園からスカウトされて、門をくぐったと思ったらここにいた」

「ええ、本当!? つてことは、君も『超高校級』なのお？」

「ああ、そうだよ。俺は芋環侑李^{オダメキユウリ}。『超高校級の』……」

……あれ？

「『超高校級の』お……?」

「『超高校級の』……」

おかしいな、そんなはずないだろ。だって俺は確かに希望ヶ峰学園からスカウトされたんだ。転校手続きをして、荷物を整えて、希望ヶ峰学園の、門を、くぐって……なに……。

自分の才能が、思い出せない。

「もしかして、自分の才能がわからないの？」

四葉に言われて、はつきりと自分の才能がわからないことを自覚させられた。そして、怖くなった。自分のいる場所がわからないことが、自分のことがわからないことが、なにもかもわからないことだらけなのが、怖い。

そして、目の前にいる四葉にどう思われているかがわからないのが、とても怖い。

「いや、はは、違うんだよ。確かに俺は『超高校級』のはずなんだよ。だって、俺は覚えてるんだ！ 希望ヶ峰学園からスカウトされたこと！ 本当に希望ヶ峰学園に来たんだよ！ 嘘じゃない！」

「侑李くん、ちよつとお……」

「俺は嘘なんかついてないんだって！ なあ、信じてくれよ！」

「落ち着いてよお、侑李くん！」

「俺は、超高校級の！」

「落ち着いてっつてばあ！」

はっと我に帰ると、心配そうな四葉の顔が目映った。……急速に頭が冷えていく。情けない自分の姿を自覚して、無意識に謝罪がこぼれた。

「…………ごめん」

「…………落ち着いたあ？　もお、急におつきい声出すんだもん、ビックリしたよお。あたし、一度も侑李クンのこと嘘つきなんて言つてないよお？」

「あ…………そつか、そうだよな。ごめん」

「もお、侑李クン、さつきから謝つてばっかりい。……仕方ないと思うよお。怖いよねえ、いきなりこんなわけのわからない所に居て、自分のこともわからなくなってるなんてえ。あたしは幸運だから幸せだけども、そうじゃない侑李クンは、不安だよねえ」
四葉は優しく微笑みながらそう言った。その様子を見て、ますます自分が情けなくなつてくる。取り乱して、喚き散らして、それを女の子に止めてもらつて。……最低だ、俺。

「こーら、暗い顔しないのお！　不安でたまらないだろうけどお、侑李クンは一人じゃないんだよ。あたしがここにいるし、それにこの建物つて結構広そうなんだあ。もしかしたら、あたしたち以外にも人がいるかもしれないよお？　だからあ、探しに行こお。あたしたち二人で」

「…………ああ、わかった。行こう」

俺は四葉の言葉にうなずいた。いつまでもここでうじうじしていたって仕方がないし、四葉に余計な負担をかけてしまう。それに、四葉の言うことももつともだ。こんなよくわからない状況で、動けるのに動かないなんてもつたいない。

そうして、俺が立ち上がったとき。今まで何も映していない、真っ暗だったテレビが、砂嵐に変わった。

ザリザリと不快な音が部屋のなかに響く。やがて、声が聞こえてきた。

『あー、あー、マイクテス、マイクテス……ごほん。館内放送です。オマエラ、もう目は覚めた？ 覚めたよね？ まだまだ寝てるような寝坊助さんは、さすがにいないよね？ これより最初の集会を行いますので、直ちに多目的ホールにお集まりください。遅れたら怒つちやうからね！ プンブンだからね！』

それでは、館内放送でした』

……不愉快な声だった。ねつとりとまとわりつくような声。その声は、言いたいことだけを言って聞こえなくなった。どうやら俺たちは、多目的ホールとやらに行かなければならないらしい。

「あちやあ、結局探索出来なかったねえ」

「……何が目的なんだろうな」

「さあねえ。とりあえず、多目的ホールつてところに行けばわかるんじゃないかなあ？」

「じゃあ、行くか。多目的ホール」

「うん。れつつごお！」

部屋を出ると、長い長い廊下が現れた。廊下は全面真っ白で、さっきの部屋と同じように、窓らしきところは例外なく鉄板で塞がれている。さっきの理科室っぽい部屋といい、真っ白い廊下といい、なんだか研究所っぽい建物だ。

「うーん、マップとかないのかなあ？ 多目的ホールってだけ言われてもお、全然場所がわからないよお」

「確かにわっかんねえな……どこまでも廊下って感じだし」

「うー……ああ！ これに入ってるかも！」

「ん？ なんだそれ、スマホ？」

四葉がポケットから取り出したのは、見たことのない型のスマホのような携帯端末だ。起動に四苦八苦しているが……四葉って、機械に弱いのか？

「んう？ わかんない」

「わかんない……って、お前のだろ？」

「んー、多分あたしのなんだけどねえ。これ、ここに来てからあたしのポケットに入っ

たものなんだあ。あたしが普段ポケットに入れてる物は全部無くてえ、代わりにこれが入ってたのお。そう言えば、侑李くんはどお？ 持ち物、ちゃんとあるう？」

四葉に言われて、自分のポケットを探る。いつも入れてたミントスとか、俺のスマホとかはなくて、代わりに出てきたのは四葉が持つてるのと同じ携帯端末だった。

「俺も一緒だ。俺が持つてるものがなくて、こいつが入ってた」

「やっぱいい。じゃあ、多分他の人もそうなんだねえ……あ、起動したあ」

「他の人……って、ああ、なるほど」

さっきの謎の声の放送。あれは明らかに多人数を意識した物だった。建物も広そうだし、俺たちとあの声の他にも人がいる可能性があるってことか。

「あー！ これー！」

「どうした？」

「この端末、起動時に自分の名前と超高校級の才能が画面に表示されるみたい！ 侑李くんもお、これを起動すれば自分の才能がわかるかもお！」

「マジか!? どうやって起動するんだ？」

四葉に教えてもらいながら、自分の端末を起動する。真っ黒だった画面に光が点り、四葉の言った通りに自分の名前が表示され……。

「……………！ おいおい、なんだよそれ……………」

一緒に表示された自分の才能は、『超高校級の??』となっていた。なんだよそれ、どうなってるんだ？ これを俺に持たせた奴にも、俺の才能はわからないってことなのか？ そんなのありかよ……。

「そんなあ……。ごめんねえ、侑李くん。変に期待持たせちゃってえ……」

「……いや、いいよ。端末起動してもわかんないんじゃない、仕方ないって」

四葉のせいでもないんだし、四葉に文句を言うのも筋違いだ。俺が文句を言うべきなのは……。あの声の奴。恐らく俺たちを誘拐した黒幕だ。

「そういや、マップは？ ……あつた」

端末には様々なタブが表示されており、そこには『MAP

』も存在した。開くと電子マップが表示され、自分達の現在位置と思われる場所には赤い光点が点滅していた。この端末、割と便利っぽいかもしれない。

「多目的ホールは、この先だねえ。場所もわかったことだし、行こっかあ」

「おう、そうだな。声の奴にあつたら文句のひとつでも言ってみよう」

「その意気だよ、侑李くん。れっつごお！」

俺たちはマップを頼りに、多目的ホールに向かって歩き始めた。

「あー！　またまた人が来たよ！　あ！　今度はお二人さん！　どーぞどーぞ、中に入って！」

多目的ホールは、俺たちのいる位置からそこまで遠くなかった。そこまでの廊下や連絡通路の窓も見てみたが、やっぱり鉄板で塞がれていた。どうやらこの場所は、絶対に外が見えない構造になっているらしい。閉塞感で息苦しくなってきた。

多目的ホールの扉を開けると、元気のいい女の子の声が聞こえてきた。言われるままに中に入ると、そこには制服がバラバラの、13人の高校生がいた。……こいつら全員超高校級なのか。そう思うと、なんか緊張するな。なんでだろ。

「んー……結構いっぱいだし、これで全員かな？　かな？」

「恐らくは。あの不協和音のような館内放送があつてから結構時間が経っている。これで全員でなければ、そいつはまだ寝ていることになるだろうな」

「しっかし15人つすかあ……どういう集まりなんすかねえ、これ」

「ちよつと待て！　16人だよ、ちゃんと数えろ！」

派手な茶髪の男の発言に被せるようにどこからかかい声が聞こえた。しかし、周りを見ても声の発生源は確認できない。同時に数も数えたが、この場にいるのは俺と四葉を合わせて15人だ。じゃあ、今の声はいったい誰なんだ？

「探し回るんじゃないよ！　居るだろ、さつきから入り口の前に！　よく見ろ！　目を

凝らして！ よく見ろよー！」

「はあ？ 入り口の前に人なんて……ってうわあ!? 居るー！」

謎の声の言う通りに入り口の前を見ると……居た。背丈はちつきくて、髪は金髪。それで、その……着ているのは普通の制服なんだが、中に虹色のパーカーを着ているのと、背中に金色の翼がついてる。……なんで今まで気づかなかったんだってくらいド派手だ。なんなんだコイツ。

「ようやく……ようやく俺を認知してくれたか……とりあえずいいか？ この部屋に居るのは、全員で、16人だ。わかったな？」

「は、はいっす……すんません」

「なににない!? 羽だあ！ なんで羽なんかつけてるの!? え、もしかして生えてるの!? だって普通制服に羽なんてつけないもんね！ すっごーい、痕跡欲しいなあ……あれ、いつの間にかいない!? どこ行ったのー!?」

「居るよ！ さつきの位置から一步も動いてねえよ！ ちつくしよう、やつぱこうなるのかよー！」

なんかさつききの女の子と派手な奴がコントを始めた。なんとというか、その……随分と気楽な奴等だな。『超高校級』って皆こんなに危機感がないんだろうか。

「ねえねえ侑李くん！ すごいねえ、あの人。あんなに派手なのに、注意して見てないと

すぐ見失っちゃうよお。あの人の才能ってきつとあれだよねえ。やっぱり『超高校級』ってすごいしい、面白いねえ」

「……待ってください。その人、その人、黄緑色の髪の人です。あなた今、『超高校級』って言わりました？」

四葉の何気ない一言に、和服の女の子が反応した。鋭い目線をこちらに向ける女の子は、ぶつちやけめちやくちや怖い。

「言ったよお。だってえ、皆そうでしょお？ あたしも、ここにいる侑季くんも『超高校級』なんだよお。だったらさあ、ここにいる全員が『超高校級』って考えた方が自然でしょお？」

「ここにいる全員が、『超高校級』……？」

改めて部屋に居る全員を見渡す。あの派手な奴と小さい女の子のコントで若干場が和んでいたが、今はホールに入ってきたときよりも緊張感がある。やっぱり四葉の予想通り、ここにいる人間は全員『超高校級』だ。一人一人の目線や顔付きからなんとなくわかる。そして、全員が『超高校級』だと確定した、ということは。

「俺たちをここに連れてきた奴……放送のあいっつて、相当ヤバイ奴なんじゃないか？

『超高校級』を15……いや、16人も同時に誘拐できるなんて、普通じゃないだろ」
俺の『誘拐』という一言で、皆の顔がさらに固まった。緊張が、不安が、皆から嫌っ

てほど伝わってくる。

「『普通じゃない』のは当然の事だ。そもそも『普通』というのとはそれだけで完結する言葉ではない。正しく言えば、『自らにとつての普通』という言葉に言い換えられるだろう」

発言したのは、学ランの少年だ。俺を真っ直ぐに見据えるその表情からは感情が読み取れず、発言も合わせて、彼が何を考えているのかがさっぱりとわからない。

「……何が言いたいんだよ。言ってることはなんとなくわかるけど、言いたいことがわからないぞ」

「言つた通りの事だ。俺は、『普通』の定義について話していた。普通という言葉を使うことに否定はしないが、それが普通ではないことを覚えておけ、ということだ」

「……はあ？」

いや、本当にこいつは何が言いたいんだ？ このよくわかんない状況で普通がどうのこうのとか……そんなこと言つてなんの意味があるんだ？

「……考えているな。考えることはいいいことだ。特に今はこの不可解な状況だ。いつにもまして考えを止めてはならない」

「……はあ」

「ふむ、生返事をするほどに考えを巡らせているのか。それは本当にいいことだ。考え

ることをやめてしまえば人は人ではなくなる。人は考える獣だ。故に獣が人であるためにには考えなければならぬ。まあ、あまり思いに耽つても、重要な何かを逃してしまうこともあるがな。……諸君、忘れてはいまいな。恐らく、そろそろだ」

はあ？ そろそろ？ そろそろってなんの事だよ？ そう言おうとして……気づく。多目的ホールの最奥。設置された演台から覗く、赤い視線に。

「はあ、あ。嫌になつちやうなあもう。折角ド派手な登場でオマエラの視線をクギツケにしようと思つてたのに、オマエラはそおんな無表情な男子高校生なんかクギツケなんだもの。知ってる？ 男子高校生っていうのはこの世で一番価値の無い生き物なんだって。そんな価値の無い生き物にクギツケなんて、オマエラ自分の人生をムダにするよお。ムダムダ。ああ嫌だ嫌だ」

そこに居たのは可愛いぬいぐるみだ。体の真ん中から右側を黒、左側を白に塗り分けられた、熊のぬいぐるみ。そいつから聞こえる声は、さっきの放送で喋っていた謎の声と一致している。

「その点、ボクのこの体を見てよ。とつてもプリチーで、それでいて……」

「うわあ！ すごい！ あれ、自立式のアンドロイドじゃない!? 本物なんて始めてみ

たよ！ しかもぬいぐるみ型！ ネジの一本でもいいから貫えないかなあ……？」

「マジかよ、すっげえ珍しいじゃん！ あーもう、なんでオレはこういう肝心なときに録画機器持ってねえかなあ！」

『『男子高校生はこの世で一番価値の無い生き物』？ ……そんな話は聞いたこともないな。面白い。考える価値がありそうだ。……そもそも、男子高校生というのは……』

「おいおい、この学ランまたなんかぶつぶつ言い始めたぞ！ いい加減誰か止めろよ！
なんかの話が始まるんじゃないの?!」

「うおお!? い、居たんすか!?!」

「居るよ！ なんでこの状況でここから移動するんだよ、おかしいだろ！ ずっと居るわ！ つつーかさつきから一歩も動いてねえって言うてんだろうがあ！」

「うるさいい！ ボクにクギヅケになつてくれたのはいいけど、騒いで良いとは一言も言つて無いぞう！ まったく、ボクはオマエラのこと、そんな風に育てた覚えはありません！」

「あなたに育てられた覚えなんかあらへんわ。冗談ばかり言わんでくれますか？」

うわうわ、なんかごちゃごちゃしてきたぞ、大丈夫か？ あの熊のぬいぐるみの声が放送の声と同じつてことは、少なくとも俺たちをここに連れてきた奴の一人……一匹？

ではあるわけで。怒らせたらヤバイんじゃない？

「ちよつと皆あ！」

四葉が声を上げた。あの白黒の熊も含め、全員の目が四葉に向く。

「色々不安なものわかるけどお、一旦、この熊ちゃんの話の話を聞こうよお。あたしたちここについても、どうしてここにつれてこられたのかについても、なんにもわからないんだよお！ 熊ちゃんが皆をここに呼んでえ、わざわざこうやって出てきてくれたつてことはあ、あたしたちに何かヒントをくれるつてことでしょお？ だったらちゃんと聞かないと駄目だよお」

四葉の言葉に、ホールはシンと静まり返る。それを見た熊が、ニヤリと笑った気がした。

「偉いなあ四葉さんは。皆も、四葉さんを見習った方がいいんじゃない？ 目上の人の話はちゃんと聞かなきゃつて言うでしょう？ どんなクソみたいな話でも、嘘つばちの武勇伝でも、聞かなきゃ生きていけないよ？」

「いや、あんた人じゃなくて熊じゃないつすか！」

熊が四葉の名前を呼ぶ。あんな端末作るだけあつて、全員の名前は把握してるらしい。

「さてさて、なんかシラけてきちゃつたからそろそろ本題に入りますね。オマエラ、ここがどこかわからないでしょ？ わからないよね？ だって今、オマエラはここに初めて

きたんだからね！　ここは『特別才能研究所』。略して、『特才研究所』！　数ある『超高校級』の才能の中でもより理解を深め、研究する価値があると判断された選りすぐりの才能を集めて研究する場所なのです！　そしてボクはモノクマ。『特才研究所』の研究所長なのだー！」

高笑いと共にこの場所と、自分の名前を告げるモノクマ。モノクマの熊だから、モノクマ？　……疑問はいっぱいある。特別な才能って言ったって、なんの告知も無しにいきなりこんなところに放り込むか？　希望ヶ峰学園に入ったあとの記憶がないのもおかしいし、俺の……才能に関しての記憶がないのもおかしい。このモノクマとやらの言葉は、何もかもがうさんくさい。……嘘を言ってるようには見えないのが恐ろしいけど。

「選りすぐりの才能……っすか？」

「そうー！　オマエらは『超高校級』の中でもエリートってことだね。エリートのエリートって言うのと、なんかとんでもない高みにいる気がしてくるけど、実際はそんなこと無いかから安心してね！　それで、オマエラには才能の研究のためにここで共同生活を送ってもらいますー！」

「はいはい！　質問しつもん！　共同生活って、いつまで？　一年間とか、二年間とか？　とりあえず、一回も希望ヶ峰学園に通わないとか無いよね？」

「良い質問だね！　良い質問には、答えないとね！　共同生活の期限は……無期限です！」

「……ん？　無期限って……無期限!?!」

「待って、無期限で……帰れへん言うことですか!?!」

「はい！　オマエらは、一生ここから出られません！　従って、帰ることもできないのです！」

「いやいやいや、流石の希望ヶ峰学園でもそこまではしないでしょ！　それが本当だったら私、友達1000人作れなくなっちゃうじゃん！」

「そもそも食料とかどうするんすか！　だってここ、窓とか鉄板で塞がれてたつすよね!?!　こんな、完璧に閉じ込められるなんて、皆飢え死にしちまうつすよ！」

「食料に関しては心配しなくて良いよ。ちゃんと、ボクが定期的に補給しておくからね！」

無期限の一言で、周囲がざわつく。俺の背にも冷たいものが走る。皆が取り乱しているのに、四葉だけが自然体だった。思わず四葉に目をやると、四葉は柔らかく微笑んだ。「うるさいなあもう！　さつき、四葉さんが注意してくれたばかりでしょ？　ボクは、この研究所の所長なんだよ？　目上の人の話はちゃんと聞かないとだめじゃない」

「いや、だからあんた人じゃなくて熊じゃないっすか！」

「いや、人とは考える獣だ。身体能力と引き換えに考える脳を得た獣なのだ。つまり、言い換えると獣でも人になれるということなのかもしれない。モノクマは獣であるが、考えている。つまり奴は人なのだ」

「いや、今そういう話はいいつすから!」

「いや、しかし……もしかしたら俺は、人というそのものの定義から考え直さねばならぬのかももしれない……」

「いいつて言ってるじゃないつすかあ! もう!」

「まったく、オマエラは無駄話が好きだなあ。ここからが大事なところなのに、聞き逃しても知らないよ? さて、オマエラの中にも、やっぱり帰りたいって言う人が居るでしょう? オマエラを預かる所長として、そういつた要望に答えられないのはどうかと思つてね。なんと! ここから帰るためのルールをご用意しましたあ♪」

「なんなんだよ、その、帰るためのルールつて」

「それはね……」

モノクマの目が怪しく光る。奴の動くはずの無い口が、一層ニヤリと歪んだ気がして、俺は思わず一步後ずさった。

「人が人を殺すことだよ」

……はあ?

「人……殺……ふええ？」

「モノクマ……あんた今何言つたんすか？ 人殺すことがここから出る条件って、それ本気で言つてんすか！」

「うぷぷ！ 当然だよ！ このボクが嘘をついたり、冗談を言つたりすることなんてありえないからね！」

「少なくとも冗談は言つてたけどお……？」

「どんな場所で、どんな方法でもオツケー！ 誰にもバレないように人を殺せば、その人はこの研究所から追放！ 出ていってもらいます！ 人殺しなんて、この研究所に置いておけないからね！」

四葉のツツコミなど意にも介さず。モノクマは含み笑いでそう言い放つた。空気が張り詰め、誰も動かない中で一人。手を強く握りしめ、ホールの床を強く踏みしめてモノクマを睨み付ける男が居た。

「あんたは！ ……ここから出るために俺たちに人を殺せつて！ 悪になれつて言ってるんすか！」

さつきから度々ツツコミを入れたりしていた、派手な茶髪だ。怒り心頭といった感じでモノクマに怒鳴っている。その度胸に関心はするが……恐ろしいのはモノクマだ。なぜって、先ほどまでは含み笑いと共にニヤついて見えたモノクマの表情が、今は無表

情になっっているからだ。

「まったくもう、うるさいんだよオマエラは。さつきから何度も言わせないでよね。それで、何？ 『悪になれって言うてるんすかあ！』だっけ？ うん。そうだよ。その通り！ ……って言ったら、君はどうするのか、竜胆クン？」

その声は俺の身を竦ませた。何か、何か悪いことが起きそうな気がする。なんだかとても取り返しのない、何かが。

「モノクマ。俺は、あんたを許さねえつす」

「ふーん、そつか。それは、ボクに対する『叛逆』ってことで良いのかなあ？ ……なら」

——キミには、相応の『オシオキ』をしなきゃいけないね！

モノクマの左目が赤く、紅く光った。それと同時に、茶髪の男……竜胆と呼ばれた彼の立っていた場所に無数の槍が突き刺さった。

「……ひっ……ひいやあああああああああ！」

誰かの悲鳴が響いた。口を抑えている人も居る。その場にへたり込んでしまった人も居る。俺は目の前で起きたことが信じられなくて、目をごしごしと擦った。

「うぶぶ……これでわかったよね？ ボクが本気だつてこと。もしもボクに逆らったら……オマエラも竜胆クンみたいになっちゃうからね！ うぶぶ……ぶひやひやひやひや……「あいや待たれい！」ひや？」

モノクマの醜悪な笑いを遮るように、芝居がかった声が響く。皆がその声の聞こえる方へ視線を向けると……居た。床に突き刺さる槍から少し横にずれた位置。声の主と思われるその男は、竜胆リンドウの首根つこを捕まえてそこに立っていた。

「な、なんだつてえ!? まさか、グングニルの槍から、竜胆リンドウクンを助けたの?」

「左様。貴様の目線、声の調子、何やら不穏な空気を感じた故。無礼ではあるが、こちらに引き寄せた」

「な……ぐぬぬぬ……そ、そんなの、許さないぞお……」

「ふむ……許さぬと。拙者がしたのは、これからの様な行爲が行われるかも知らず、ただこやつ^の位置を変えただけ。これも謀反だとしても言うつもりか? 拙者には決して謀反の意味はないのだが……拙者にもオシオキとやらを行うのか?」

妙に古くさい言葉遣いをする男は、鋭い目線でモノクマを睨む。その様子を忌々しげに見ていたモノクマは……突如。やる気なさげにはふう、とため息をついた。

「テンション下がるなあ……なんだよ、折角グングニルの槍を召喚したのに助けちゃうんだもんなあ……もういいよ。ボクが本気だつてことは、わかつたでしょ? ボクに逆らったらああなるから、ボクには逆らわないよーに! 細かいルールはオマエラのポケットにねじ込んでおいたIDパッドにも追加しておいたから後で確認しておいてね。確認せずにルール違反をしても、許してあげないからね! じゃあ、ボクもう帰るから。」

やる気無くしちゃったから、帰るから。じゃあね！」

モノクマは振り返ると、気怠げに演台の裏へと降りようとす。俺はモノクマから目を離すことが出来なかった。目を離したら、また誰かのいる場所に……もしかしたら、今自分のいるこの場所に。無数の槍が突き刺さるのではないか。そんな気がして、それが怖くて。

「ねえ、待って、モノクマあー！」

四葉がモノクマを呼び止めた。モノクマはゆっくりと、黒い左半身からこちらを向いた。

「何、四葉サン？ ボクは帰るって言ってるんだけど。もしかして、キミも反逆するの？
皆でスパルタクスなの？」

不機嫌そうな声。赤い目は相変わらず怪しく光っていて、もう少しでも機嫌を損ねれば誰かが死ぬような、そんな気配を感じさせる。

「別に、反逆とかじゃないよお。ただ、ちよつと気になったの。モノクマはあ、『誰にもバレないように人を殺せば』ここから出られるって言ったよねえ？ じゃあさあ……もし、人を殺したことが誰かにバレたら、どうなるのお？」

「お？ なになに？ もしかして、人を殺す気になった？」

モノクマの声が少しだけ上機嫌になり、こちらに完全に振り返った。赤い目の発光も

止み、別の意味で目を輝かせている。

「んーん、全然。あたし、人を殺す必要なんてないもおん。言ったでしょお？　気になっただけ、だよお」

「なあんだあ……つまんないのお。はあ……で、なんだっけ？　人を殺したことがバレたらどうなるのか？　別に説明しても良いんだけど……ボクはもうやる気無くしちゃってるからなあ。なんにも起こってないのに説明するのも面倒だし、今は説明しませんが……人を殺したことが誰かにバレた時どうなるのかは、オマエラが人を殺したときに説明するから、それで良いでしょ？　ほんじゃボクはもうホントに帰るから。じゃあねオマエラ。オマエラのエキサイティングなコロシアイ、楽しみにしてるよ！」

そう言い残して、結局四葉の質問に答えることもなく、モノクマは去っていった。あいつの口ぶり、なんなんだよ。まるで、絶対に誰かが人を殺すって。コロシアイは絶対に起きるって……言ってるみたいじゃないか。

ようこそ特才研究所 2

モノクマが去った後、動く奴は誰一人としていなかった。きつと、誰も動けないんだ。言われたことが理解できなくて、起きたことが理解できなくて。当然だ。こんなもん、理解しろっていう方が酷だろう。なんだよ、無期限の共同生活って。なんだよ、出たければ人を殺せって。

「なあ、オレたちこれからどうするんだよ?」

濃い緑色の髪に黄色のメツシユをかけ、耳にじやらじやらとピアスを下げたチャラそうな男が、不安そうな顔で言った。答える者はいなかった。

空気は重く張り詰めている。ヤバイ。何がヤバイとか具体的なことは言えないけど、ヤバイ。このままじゃ、あのモノクマの言う通り……誰かが、人を殺してしまえば、気が、する。

「……本当なのかな? 共同生活とか、ここから出られないとか。あ、ああそうだ! ねえ、ドツキリとかない? これが、希望ヶ峰学園流の新入生歓迎会! みたいな?」
紫色の短髪の女の子が、やけに明るい口調でそう言った。それはとても無理をしているような声で、少し胸が痛くなる。

「そりやないっすよ。じゃあ俺は、新入生歓迎会で殺されかけたことっすか？ あそこに突き刺さってる槍、あれ本物でも偽物でも、直撃してたら俺死んでるっすよ」

さつき殺されかけていた竜胆の言葉に、ドッキリの女の子が言葉を失った。彼女はこの状況がドッキリなんかじゃないことは十分にわかっているんだと思う。でも、言わざるを得なかつたんじゃないだろうか。不安でしかたがないから。

「……そう言えば俺、助けてもらったのにお礼言つてなかつたっすね。ありがとうっす。本当、助かつたっすよ」

「気にすることはない。あそこで死なれては拙者の寝覚めが悪かつた故な」

「気にしないなんて無理っすよ！ 『超高校級のボランテア』の名に懸けて、次にあんなに困つたとき、絶対に助けになってみせるっす！ ……つて、今まさにその困つてる状況なんすよね。……これはちよつとどうにもできないっす」

「ほう、お主の才能は『超高校級のボランテア』なのか。……正義感が強いのも道理だな」

「そうっすよ！ ……俺、許せねえっす。皆をこんなところにつれてきて、閉じ込めて、人を殺せなんて……！ 俺、悪いやつはどんなやつだつて許せないっすけど、人殺しが一番許せねえんすよ！ それを皆に強制しようとしてるあいつも、絶対許せねえんすけど……俺、なんもできねえっす。すげー悔しいっすよ、俺」

「……左様か」

強く手を握り、心の底から悔しそうに言葉を吐き出す竜胆に、竜胆を助けた白髪の男は若干顔を背け、どこか言いづらそうに答えた。まるで何か後ろめたいことがあるかのようだ。

「提案がある」

低く艶のある、いい声がホールに響いた。皆の視線が声の主、青髪の、背の高い男に集中する。真剣な表情で周りを見渡した彼は、表情を変えずに次の言葉を告げた。

「皆、とりあえず自己紹介をしないか？」

それは、初対面の人間が集まるこの場では当たり前前のことで、でもここまで誰もやろうとしていなかったことだった。

「そう言えばあ、皆お互いの才能と名前知らなかったねえ」

四葉がそう言って笑う。青髪の男はうなずいた。

「この状況、皆で協力するべきだと俺は思うんだ。一人一人だとか細くて、挫けてしまいうような音しか出せなくても、皆の音を束ねれば必ず素晴らしいハーモニーが奏でられるはずだ。そのためにはまず互いの名前を知らなくてはならないからな」

「……ええと、一人だと心細くても皆で協力すれば心を強く保てるってことでいいか？」

「そう言うことだ」

言ってることが所々よくわからなかったから聞いてみたが、合っているらしい。しっかりしたやつかと思つたんだが……こいつ、変なやつなんだろうか。よくわからん。

「はいはい！ ていも賛成！ 一人で手がかり追つてても、限界あるもんね！ これからどうするか、皆で一緒に考えられるならそれに越したことはないよ！ 三人寄れば文殊の知恵つてやつだよ！」

「そーいや、すっかり忘れてたな、自己紹介とか。オレ知名度高いからさあ、あんまり自分から自己紹介とかしないんだわ。マズったマズった」

「お名前を知るのには友達になる第一歩だもんね！ 馬鹿だなあ、私。なんでこんな大切なこと忘れてたんだろ」

「じゃあないわ、こんな状況やさかい。当たり前のことなんていちいち考えてられへんわ。そやけど、大事なことやね。言うてもろて助かったわ」

「ならば迅速に行動に移しましょう。次にとる行動が決まった以上、一分一秒を無駄にしてはいけません」

「……はっ！ これ、黙つてたら俺が自己紹介してないの忘れられるパターンだよな！ 忘れんなよ！ 絶対だからな！ 俺もいるぞ！ うおおおおおおお！」

「うーるーさーいー！ ていの真横で大声出さないでよ、もうー！」

次々と賛成の声が上がり、張り詰めた空気が少し弛緩した。モノクマがやって来る前

の空気に戻ったようで、少し安心した。……でも、自己紹介、か。才能と名前を皆の前で言うんだよな。自分の才能が思い出せないことを皆に言つて、大丈夫なのか？ ……ちよつと、不安だ。

「さて、俺が最初に言い出したことだし、最初に自己紹介をしようと思う。俺の名は、伊藤荒瀬イトウアラセ。希望ヶ峰学園には、『超高校級の指揮者』という肩書きで入学する予定だった。よろしく頼む。……さて、次は誰の自己紹介を……」

『超高校級の哲学者』藪蘭馬酔木ヤブランマセキ。これでいいな？ 俺は行かせてもらう」

それまでの空気をぶち壊すような、敵意さえ感じさせるほどの冷たい声でそう言い放つたのは、さつき普通の定義がどうか言つていた学ランだ。感情たつぷりの声とは裏腹に、馬酔木は不気味なくらい無表情だった。

「待つてくれ、どこに行くんだ？ 俺たちはこれから協力するために自己紹介をしていくんだ。互いの事を知るためだ。自分の名前を言つて終わりでは意味がない」

「俺からすれば。こんな愚か者の集まりに時間を取られることこそ意味がない。興味がある者の名は後で俺から聞きに行く。それでいいだろう？ ……では、俺は、行かせてもらう」

最後の一言には、それ以上の口答えを許さないという迫力があつた。俺たちは誰一人として、多目的ホールから出ていく馬酔木を呼び止めることが出来なかつた。

「……なんなんだよアイツ。感じわりいな」

「だな。せつかく良い空気になってきてたのに」

緑髪黄色メツシユがついた悪態に俺も同意した。何も今空気をぶち壊すことはなかっただろ。出ていくんならもつと早く出ていけばよかつたじゃないか。

「で、でも、本当によかつたんですか？ あの人ほつといて。あんなの、何するかわかりませんよ。怖いです……」

「んー、今は気にしない方がいいよ。気にしても仕方ないし。注意する必要があるかもしれないけど、それよりも！ まずはやーんと自己紹介しなきゃね！ ってことで、はいはい！ 次、ていが自己紹介してもいい？」

落ちかけていた空気でも変わらないテンションで声を上げたのは、俺と四葉が多目的ホールに入ったときに迎え入れてくれた、背の低い女の子だ。荒瀬が首肯すると、嬉しそうになつこりと笑い、ぴよんぴよんとウサギのように跳び跳ねながら皆の前に出てきて、ピシツと警察官のような敬礼をした。ウサギの耳みたいに結われた髪の毛がふよふよと揺れた。

「ていはねー、スズカケ鈴懸スズカケていって言うんだよ！ 『超高校級の鑑識官』なんだー！ よろしくね！」

『超高校級の鑑識官』……そんな才能もあるのか。すごいな、高校生で鑑識官って。

いったいどんな風に過すごしてきたんだろうか。気になる。

「じゃあ次、俺行きまっす！ ……って言っても、皆俺の話聞いてたと思うっすから、なんとなくわかると思うっすけど…俺の名前は柳井ヤナイリンドウ竜胆リウドウっす！ 『超高校級のボラントイア』っす！ ……本当は、『超高校級のヒーロー』って呼ばれたかつたんすけどね。現実にヒーローなんて居ないっすから仕方ないっす！ よろしくっす！」

「あ、じゃあ、次私！ 私、テンジクアオイ天竺葵アオイ！ 『超高校級のパルクールプレイヤー』！ えっと、モットーは『一緒に走れば誰でも友達』で、夢は友達1000人作ること！ よろしく！」

続いたのは竜胆と、薄紫の短髪の女の子、葵。葵はさっきのドツキリ発言の時の不安そうな顔とは違って、良い笑顔で自己紹介をしている。

「あ、あの！ 次、ワタシ良いですか？ 良いですよね？ 『超高校級の図書委員』野薊ノアザミアロエです！ 本が好きです！ お喋りも好きです！ 仲良くしてください！」

アロエは、右目を隠すほど長い前髪と、一本の三つ編みが特徴的な水色の髪の女の子だ。見た目からなんとなくミステリアスな印象を受けていたのだが、意外にハキハキ喋るんだな。あまり本好きっぽくないなあ…と思うのは、俺の偏見だろうか？

「んじゃ、次オレ行くか。つつても、お前らはオレのこと、一度は見たことあるはずだぜ？ オレは『超高校級のmetuber』！ SOJIチャンネルの三角総司ミスミソウジ様だぜ

「！」

「……あー！　ほんとだあ！　すごいすごおい！　ねえねえ侑李くん！　SOJIだよお！　本物のSOJIだよお！　なんで今まで気づかなかったんだろ……！　後でサイン貰いに行っても良いかなあ？」

「あー……そう言えば見たことあるような。つて言うか四葉、痛い。肩をバシバシ叩かないでくれ。わかったから」

「だってSOJIなんだよお！　これは叩かざるを得ないよお！」

「いや、なんだよそれ……痛いって」

四葉のやつ、すごい食いつくな。どんだけファンなんだよ。……俺はmetuberとかはあんまり好きじゃなくて見ないから詳しくはないんだが。SOJIちゃんネルのことは知っている。確か、投稿したすべての動画が1000万再生を越えているとかいうヤバイ実績を持つてた気がする。そりゃ『超高校級のmetuber』何て呼ばれるわけだ。というか、四葉にはそろそろ肩を叩くのをやめてほしい。痛い。

「それじゃあ、次はウチが行かせてもらいます。『超高校級の和菓子職人』サクラパンオン桜庭紫苑と申します。どうぞ、よしなに」

和服を着た、京言葉の綺麗な女の子は紫苑と言うらしい。ずっと思っていたんだが、さつきからずつと発言に棘がある気がするのは気のせいだろうか？　方言のニュアン

スってどうもよくわからない。

「そろそろ、わたくしも自己紹介させていただきますわ。……皆様、愛です！」
 ……ん？

「……ええと、君の名前は、愛というのか？」

「……あら、失礼。わたくしの悪い癖が、いえ、愛が！ 出てしまいましたわ
 な、なんだこいつ。ちよつとよくわからないぞ。……よくわからないぞ？」

「わたくし、『超高校級の愛の伝道師』クレナイチカ 紅千日と申します。皆様、愛……いえ、よろしく
 お願い致しますわ！」

これは、触れない方がいいんだろうか。なんでいちいち愛って言うんだ？ なんで愛
 だけやけに強調して言うんだ？ そもそも、愛の伝道師ってなんだ……？

「……四葉、あれ、なんだかわかるか？」

「あたしは触れない方が良く思うなあ」

「やっぱそうか」

うん。放っておこう。なんか一度喋りだしてからずっと愛って連呼してるけど。

「……これは、次に行っても良いのかな？」

「ああ、放っておいた方がいいだろうな。あれは……」

「なるほど。無視ですわね？ それもまた愛ですわ！」

「……そうだね。放っておいて次に行こう。僕は高波山茶花タカナミサザンカ。『超高校級の薬剤師』だ。……といっても、薬の知識があつて、親の手伝いなんかをしてるだけだから、正式な薬剤師とかじゃないんだけどね。よろしく」

「次は私ですね？ 『超高校級の秘書』葉牡丹ハボタン紗奈サナ。よろしくお願いします」

紗奈と名乗った黒髪眼鏡の女の子の自己紹介は、無駄を極限まで削ぎ落としたような、早口で簡素なものだった。『超高校級の秘書』っていう才能からそうなっているのはわからないが、もうちよつと落ち着いてもいいんじゃないかと思う。

「じゃあ次はあ、あたしが自己紹介させてもらうねえ？ あたしの名前は立藤四葉。『超高校級の幸運』だよ。皆あ、よろしくねえ」

次に名乗ったのは四葉だ。相変わらずの間延びしたしゃべり方で、なんだか和む。……出会つてすぐはヤバイやつかなつて思つてたけど、考えすぎだったのかもしれない。取り乱した俺をなだめてくれたり、一緒に行動してくれたら……。思えば四葉に迷惑掛け通しだな、俺。あとでなんかお返ししないといけないな。

「ねえ、次は侑李くんが自己紹介したらあ？ 才能のことについてはあ、あたしがフオロ―するから安心してえ」

……本当、四葉には迷惑掛け通しだ。俺が自分から自己紹介しづらいと思つていたこ

と、気づかわれていたらしい。四葉の言葉を聞いたのか、皆の視線が俺に集まる。俺はそれを確認して、一度目を閉じた。小さく深呼吸を一つ。……うん。覚悟は決まった。言おう。

「皆が良いなら、次は俺が自己紹介をさせてもらおう。俺は、オダマキユウリ苧環侑李。……超高校級の才能は、思い出せない」

「……超高校級の才能が思い出せない？ 本当か？」

荒瀬が訝しげに問う。俺は頷くことしかできない。

「モノクマがあたしたちのポケットにねじ込んだって言ってたあ、IDパッドはねえ、起動するとお、自分の名前と才能が最初に表示されるんだけどお……」

「俺も、思い出せない自分の才能がわかるかもしれないと思つて起動したんだ。でも……」

四葉のフォローでIDパッドの事を思い出した俺は、ポケットからそれを取り出して起動し、皆に見せる。

『超高校級の??』……モノクマに意図的に隠されてるってことか？」

「たぶん、そうだと思う。あたしのはほら、ちゃんと『超高校級の幸運』って表示されるからあ」

俺に続いて四葉がIDパッドの画面を見せた。それで皆も完全に信じてくれたよう

だ。

「なるほど。理解した。……早く思い出せるといいな、芋環」

「ああ。ありがとう」

驚くほどにあっさり、荒瀬は俺のこゝを受け入れてくれた。……いや、本当に受け入れてくれたのかはわからないけど、少なくとも早く思い出せるといいなって言葉に嘘はなさそうだ。……とりあえずは、よかった。

「四葉も、ありがとな」

「ふふ。どういたしましてえ」

四葉にも小声でお礼を言うと、四葉はいつもと変わらない笑顔でそう言った。

「さて、あと残っているのは……」

「そろそろ、拙者も名乗らねばならぬな」

すつと手を上げたのは、竜胆を助けた、非常に短い白髪の子。彼は自己紹介をするだけだと言うのに、何やら神妙な顔をしている。……まあ、俺も人の事は言えないんだが、どうしたんだろうか。なにか、言いづらい才能だったりするのかな？

「拙者、ヤツルマキクソウ矢車菊三と申す者……『超高校級の義賊』と、呼ばれておる」

「……義賊？」

菊三の言葉に反応したのは竜胆だ。信じられないといったような顔で、呟くように言

葉を吐くと、菊三に詰め寄ってその胸ぐらを掴んだ。

「ひ、ひいやああああ!!」

「おい、柳井! いきなり何をやってるんだ!」

「なにになになに!! どうしたの!! 菊三君はなんにもやってないよ! 落ち着いて!」

「あんたは! ……あんたは、泥棒だったんすか?」

……そうか、そういうことか。思い出した。竜胆はさつき言っていた。悪はなんでも許せないって。義賊ってのは、要するに泥棒だ。それは確かに悪と呼べるものだろう。でも。

「待てよ竜胆。義賊ってのは泥棒でも、悪いやつから金を盗んで貧乏人に分け与えるみたいな、どつちかというところ正義の味方よりの泥棒だろ? お前の嫌いな悪って訳じゃないんじゃないか?」

「そんな関係ねえつすよ。泥棒は泥棒つす。悪事は悪事つすから」

「……左様。拙者は腐つても盗人だ。荒瀬殿。申し訳ないが、拙者もほーるから出ようと思う。ここに拙者がいても、空気を悪くするだけ故な。故に……離して貰おうか。竜胆」

菊三は自分の胸ぐらを掴む竜胆の手をひっぺがすと、ホールの出入り口から去っていった。竜胆はそれを、複雑そうな顔で眺めていた。

「……またひと悶着あったが、気を取り直して次に行こう。あと自己紹介をしていないのは……そうだな、その白い髪の毛の女性か？」

「うー！ ……は、はい……すみません……」

「ああいや、謝る必要はないんだが ……自己紹介をお願いする」

「はい……わ、わかりました。うう……えつと、白粉花子シラコチハナコです……ち、『超高校級の大道芸人』です。すみません……」

そのか細い声には聞き覚えがある。たびたび叫び声をあげていた子はこの子か。女性のなかでも飛び抜けて背の高い彼女は、今もなにかに怯えるように震えていて、とても臆病なのがかかる。

「さて……これで全員の自己紹介が終わったかな。さて、次はこれから皆で何をするかだが……」

「おい！ 待てよこらあ！」

全員の自己紹介が終わったのを確認して、話を進めようとした荒瀬に対し、大声で待ったがかかった。……いや、でも確かに全員の自己紹介が終わったはずなんだ。俺が見渡す限りもう名前がわからないやつはいな……あ。

「忘れんたって！ 言っただろうがああああああ！」

居たわ。まだ自己紹介してないやつ。あの金髪だ。羽のやつ。……なんであんな派

手なやつ忘れてたのか全くわからないんだが。あれか？ 才能か？ ……なんの才能だよいつたい。

「つていうかき。自己紹介なんだし、忘れてほしくなきや自分から早めにすればよかつたじゃないか。なんでわざわざ一番最後まで残つてたんだよ」

「はあ!?! そりやお前、誰かに気づいてもらいたいっていう仄かな乙女心だろうが!」

「乙女心つて……いや、お前男だろ?」

「男が! 乙女心を持つていないとでも言うのかお前は! 偏見だぞ!」

「いや、俺そういうこと言つてんじゃないんだけどな……」

まあこいつが乙女心だつて言うならそうなんだらう。なんかもうどうでもいいや、めんどくさいし。

「もー、めんどくさいなあ。金髪君はさつさと自己紹介しちやつてよー!」

「き、金髪だとお!?! 俺の! ことを! 金髪つて呼ぶなウサギ擬き! そんな生徒Aみたいな呼ばれ方じゃ、俺の印象が薄れるだらうが!」

「うさつ……!?! だ、誰がウサギ擬きよ! ていには鈴懸ていつて名前がちやあんとあるんですー! あと、ていがあんたを金髪つて呼んだのは金髪がさつさと自己紹介しないからでしょ、この金髪! あと、印象は元々薄いでしょー!」

「何回も金髪つて言うんじゃないやねえウサギ擬き! あと印象薄いつて言うな! 気にして

んだからなクソー！」

「あー、わかった！ もういいか？ もういいな？ 君が自己紹介をしていないことに気づかなかったのは俺が悪かった。だからアフレッタンド。急いで自己紹介を終わらせてしまおう。話が前に進まない」

本当に騒がしいなああの金髪。ていもだんだんヒートアップしてたし、この喧嘩、荒瀬が止めなかつたらいつまで続いてたんだかわからない。会ったばかりでよく喧嘩できるなコイツら。よっぽど相性悪いんだな。

「チツ。わかったよ。自己紹介してやるよ。お前ら！ 耳の穴かっぽじってよく聞けよ！ 俺様の名前は！ ガマズミサンバ 波波波だ！ 忘れないように脳ミソに刻み込みやがれ！」

……さんば？

「え……う？」

「さん、さんば……う？」

「いやあ……すごい名前だねえ……」

「ぷ、ふふ……さんば、さん、さんば……さあんうばあつはははははははははは！」

「うるつせえ！ 笑うんじやねえウサギ擬き！」

「いや、だあって、さんばつて！ さんば……つふふ、ああ！ もしかしてあんた名前がサンバだからうるさいのー!? あつはははははははははは！」

「笑うなつつつてんだろうが！ 俺だつて好きでこんな名前に生まれてきた訳じゃねえんだよクソー！」

「あつははははははひやあ！ いやいいひやいいひやい！ ほつへはひつはらはいへー！」

金髪……サンバの名前を聞いて、皆から困惑の声が上がる。ていは大爆笑だ。笑うのは流石に失礼だと思ふけど、仕方がないっちゃ仕方がないかもしれない。いや、だつて、なあ？ まさかそんな名前だとは思わないじゃないか。キラキラネームつてやつか？ なんて言えいいのかわからないけど、なんか、凄まじいな。あいつは絶対に忘れないようにつて言つてたけど、忘れられる気がしないわ、俺。ちなみに大爆笑してたていは怒り心頭のサンバにほつぺたを引つ張られている。自業自得かな？

つていうか、あれ？ 凄まじい名前に気をとられてうっかり忘れそうになつたけど、こいつ才能言つてなくね？

「なあ、えつと……サンバ？」

「あんだよ！ 俺は今このウサギ擬きのほつぺたを引つ張るので忙しいんだが？」

「いや、それはもうそろそろ離してやれよ。ていのほつぺた真つ赤だぞ？ ……つてそ

うじゃなくて！ お前、才能言つてないよな？」

「……………ぎくつ!？」

いや、ぎくつて。口で言ってるやつ初めて見たぞ。

「皆ちゃんど名前と才能を言ってるんだから、お前も才能を言ってくれよ。正直俺、お前の才能気になって仕方がないんだが」

俺の話をや汗だらだらで聞いていたサンバは、ていのほつぺたを引つ張りながらゆつくりと周りを見渡した。皆じいつとサンバのことを見ている。やがてサンバは、諦めたように深い溜め息をついた。その間、ていはずつといひやいいひやいと言っていた。そろそろていのほつぺたを離してやれよ。

「……………きだよ」

ぼそり、とサンバが呟く。まるで聞こえない。

「おいサンバ、聞こえないぞ。もっと大きな声で言ってくれよ」

「……………うきだよ」

再びぼそりと呟く。まだ聞こえない。ていのいひやいしか聞こえない。

「サンバ、もうちよつと大きく言ってくれ」

「『超高校級の空気』だよ！ちくしょー！」

「痛い！もっと優しく離してよばかー！」

……………なんにも言えねえ。なんだよ『超高校級の空気』って。いじめかよ。

皆も俺と同じ気持ちなのか、微妙な顔で黙っている。しんとした多目的ホールに、サ

ンバとていの喧嘩の声だけが響いている。……こいつら元気だな。

「あー、自己紹介ありがとう！ ……もういいだろうか？」

荒瀬が一際大きい声で二人を制す。サンバとていは喧嘩のしていた勢いのまま、息ぴったりに睨み付けるように荒瀬を見る。が、流石に荒瀬を無視してまでそのまま喧嘩を続ける気も、喧嘩を止めようとした荒瀬に当たり散らす気も無いらしい。二人は無言になり、そのまま互いに視線を戻すと、バチバチと火花が散るくらいに強く、強くにらみあつてからぶいつと顔をそらした。二人の身長も相まって小学生みたいだ。

「では、話を前に進めよう。……これからどうするか、なのだが。考えていたことがある。皆、自分がどういう経緯でここに来たか、覚えているか？」

「んー？ えつとねえ、ていは確か……希望ヶ峰学園まで来て、門を潜ったところで意識が途切れて、それで起きたらここにいたって感じかな」

「俺も一緒だ。それ以外の人は居るか？」

誰も声をあげない。どうやら皆状況は変わらないらしいな。俺だけ、自分の才能を覚えてないって違いはあるけど。それは大した違いじゃない。

「……なるほど。この様子じゃ、今ここにいない二人も変わらないだろうな。まあ、藪蘭と矢車には一応後で聞いておこう。それで、次にすることだが……」

「ああ、それならあ、あたしから提案があるよお」

四葉がそう言った。四葉はIDパッドを取り出すと、ひらひらとみんなに掲げて見せる。

「みんなあ、覚えてるかなあ？ モノクマが言っていた、『ルールはIDパッドに追加した』って言葉。まず最初に、それを確認した方がいいと思うんだあ」

「……ふむ、そうだな。それがいい。ルール違反を犯したらあのモノクマに何をされるかわからんからな」

「また竜胆クンみたいに、誰かが……殺されかけるかもしれないしねえ」

俺は未だ床に刺さったままの槍を見た。四葉は言葉をぼかしたけど、ルールを破ったことでモノクマに何かをされるのなら、それは『殺されかける』じゃない。『殺される』だ。竜胆が助かったのは菊三のお陰で、運が良かったただだから。

「それじゃあ皆、自分のIDパッドを取り出してルールの確認をしてくれ」

「ここにいない二人にはあ、後であたしが伝えておくねえ。まあ、あの二人ならちゃんと自分で確認してそうだけどねえ」

「違ういな」

皆がパッドを取り出してルール確認をする中、俺も自分のIDパッドを起動させる。……相変わらずの『超高校級の??!』という表示が忌々しいけど、腹をたてても仕方ない。そのうちちゃんと思いつく……はずだ。

IDパッドには、『ロシアイ研究会ルール』という名前のアイコンが追加されていた。それをタップすると、モノクマがデザインされたポップで悪趣味なページが現れた。思わず顔をしかめるが、そんなことは気にしていられない。ルールを確認しな
きや。

《ルール1》生徒たちはこの研究所内だけで共同生活を行いましょう。共同生活の期限はありません。

《ルール2》夜10時から朝7時までを”夜時間”とします。夜時間は立ち入り禁止区域があるので注意しましょう。

《ルール3》就寝は寄宿舎エリアに設けられた個室でのみ可能です。他の部屋での故意の就寝は居眠りとみなし罰します。

《ルール4》特才研究所について調べるのは自由です。特に行動に制限は課されません。

《ルール5》研究所長ことモノクマへの暴力を禁じます。監視カメラの破壊を禁じます。

《ルール6》仲間の誰かを殺したクロは”追放”となりますが、自分がクロだと他の生徒に知られてはいけません。

——尚、ルールは順次追加となる場合があります。

……なるほど。今のところ、モノクマに暴力を振るうか、寄宿舎の個室つてところ以外で眠らなければモノクマは特になにもしてこないつてことか。

「皆、確認は終わったか？」

荒瀬の言葉に皆がうなづく。それを確認してから、荒瀬は続けて言った。

「今ここに居る皆の中に、ずっとここで暮らしたいつて人は、いないな？」

これにもうなづく。

「……なら、俺たちがとるべき手は、脱出の手がかりを探すことだ。皆もここに来るまでに見ているだろうが……この研究所は、窓も玄関も鉄板で封じられている。だが、モノクマが俺たちをここにつれてきたのなら、必ずどこかに外と繋がる場所があるはずだ」

「モノクマは『食料を定期的に補給する』つて言つてたからあ、外に出る手段が全く無いつてことは無さそうだねえ」

「ああ。だから俺たちは、それを探す。幸いモノクマは俺たちに探索の自由を与えてくれている。いいか！ 誰かが誰かを殺す必要なんてない！ 皆で協力して、ここを出よう！」

荒瀬の力強い宣言に、どこか勇気づけられた。荒瀬の言う通りだ。四葉の補足した通りだ。俺たちは人を殺す必要なんてない。皆で協力して出口を見つけなければいい！

「おー！ つす！ 盛り上がってきたつすねえ！」

「荒瀬！ オマエ最高だな！ ほんつと、今録画機器がないのが残念だぜ！」

竜胆と総司を筆頭に、次々と響く荒瀬を称賛する声。皆の心がまとまり始めた気がする。……流石は『超高校級の指揮者』ってところか。

「では、行動開始といこう。ひとまずは各自自由に研究所を調べよう。マップもあるが、しっかりと建物の構造やどこに何があるのかを確認しておいた方がいい。時間は……そうだな。二時間後にまたここに集合し、各自探索結果の報告といこう。では皆、よろしく頼む！」

皆がそれぞれに動きだし、いよいよ研究所の探索が始まる。俺も頑張らなきゃいけない。皆で一緒にここを出るために。